

## 地域公共交通の課題と展望

～ＪＲ連合地方議員とともに考える地域交通のあり方～

### VOL. 19 熊本県 菊池郡 大津町（山部良二 町議会議員）

ＪＲ連合及びＪＲ九州労組中央本部及び熊本地方本部は、２月１３日、熊本県菊池郡大津町を訪問し、組織内議員であり、現役社員でもある山部良二町議会議員とともに同町の現状を視察した。また、２０１６年４月に発生した「平成２８年熊本地震」では同町役場庁舎が使用不能になるなど、極めて甚大な被害を受けており、深刻な被害を受けたＪＲ九州・豊肥本線の復旧状況についても現状を確認した。そして、大津町役場において同町の交通政策担当者との意見交換を行った。ＪＲ連合から尾形事務局長、北村労働政策部長、中村交通政策部長、ＪＲ九州労組中央本部から木村中央執行副委員長、住吉共闘部長、熊本地方本部から桃北執行副委員長、本多執行副委員長が参加し、さらに山部町議と同じく現役社員かつ組織内議員である松尾哲也 大牟田市議会議員にも同行いただいた。



#### ■熊本県菊池郡大津町の現状と、同町における公共交通の状況

大津町は熊本市の東に位置し、阿蘇山との中間地点にある。面積は99 km<sup>2</sup>で、4つの工業地帯を有しており、熊本駅から大分駅間を結ぶＪＲ九州・豊肥本線が町の中心部を東西に横断し、さらには阿蘇くまもと空港や熊本ＩＣにも近く、交通条件にも恵まれている。したがって、熊本市内への良好なアクセスとともに、また阿蘇観光の中継点・拠点としての機能が町の発展に寄与してきた。

現在の人口は3万3千人を超えているが、昭和50年代頃より人口増加が始まり、今もなお増加を続けている。また、人口ピラミッドも各年代がバランス良く居住している形となっている。

同町における交通状況は、東西を貫くＪＲ九州・豊肥本線や国道57号を中心とした交通網が形成されている。公共交通としては、鉄道、路線バスに加え、乗合タクシーで残ったエリアをカバーしている。

鉄道は、ＪＲ九州・豊肥本線の肥後大津駅と瀬田駅が存しており、震災前は「九州横断特急」や観光列車「あそぼーい！」が運行されていたが、震災直後より肥後大津～阿蘇間が不通となり、代替バスの運行を実施している。現在、2020年度内の復旧にむけて工事等が推進されており、復旧後は熊本～大分間を結ぶ鉄路として地域活性化につながることを期待される。

路線バスは、現在5路線が運行されており、路線バスによりカバーされない北部・南部エリアについては、同町が行う「乗合タクシー」を展開している。「乗合タクシー」は1日4便で最大500円の利用料金で同町の中心部と結んでいる。

その他として、肥後大津駅と阿蘇くまもと空港を結ぶ「空港ライナー」が運行されており、観光やビジネスなどの需要に対応している。



▲ 緑の部分が大津町。町の中心部には肥後大津駅があり、西に熊本市、東に阿蘇山があり、阿蘇観光や空港アクセスの拠点でもある。(地図：大津町観光協会HPより)

## ■大津町（豊肥本線復旧エリア含む）の公共交通現地踏査と課題等

2月13日、一行は大津町へと赴き、JR連合地方議員団連絡会に所属する山部良二・大津町議会議員とともに、同町の公共交通と取り巻く環境等を把握するべく現地踏査を行った。

まず、同市の中心部にある肥後大津駅における利用者の流動等を視察した。肥後大津駅はJR九州・豊肥本線が運行しており、多くの住民らが利用している。（乗車人員2,603人/日※2018年度実績・JR九州公表データより）なお、2016年に発生した熊本地震によって、同路線が大きな被害を受け、現在に至るまでも肥後大津～阿蘇間が不通となっている。しかし、現在復旧工事を進めているところであり、2020年度中の運転再開が見込まれている。



▲ JR九州・豊肥本線の肥後大津駅が町の中心地にあり、町内の各地域や空港へのアクセスの拠点となっている。また「阿蘇くまもと空港駅」と愛称も付与されている。

また、路線バスは北口・南口にそれぞれ乗り入れており、東西・南北の交通の結節点となっている。さらに、阿蘇くまもと空港の最寄り駅として、駅前から無料で利用できる「空港ライナー」が運行している。「空港ライナー」は肥後大津駅前から概ね30分間隔で運行し、空港まで約15分ではない。基本的にはジャンボタクシー用の車両であるが、利用者数に応じて、続行便を運行するなど、非常に柔軟な運用を行っている。「空港ライナー」は熊本県による事業であるが、空港利用者に対するJR利用促進とともに大津町への経済活性化に、大きな効果をもたらしている。

次に、豊肥本線の被災箇所に向かった。まず訪れた瀬田～立野間では山間を通り抜ける沿線のいたるところに土砂崩れの爪痕が残っており、斜面に立つ樹木の境目が線を引いたようにくっきりとしていた。しかしながら、鉄道の復旧工事は着実に進められており、道床やレールなども敷設されているところが散見された。

さらに、熊本地震で最も深刻な被害のあった立野～赤水間では、すさまじい大規模斜面崩落の現場が残されていた。震災直後にも視察等に訪れたこともあり、当時の衝撃は記憶に新しく、深く刻まれたところである。現在では、崩落した阿蘇大橋の架け替え工事や斜面の補強工事が着々と行われている光景が見受けられたものの、まだまだ時間を要すると思われる。一方で、鉄道部分については、バラストが敷き詰められた道床が遠目からも確認できたものの、同区間においては、山側の工事が十分に進められないことには鉄道の運転再開には踏み切れないものと考えられる。



▲ 木村副委員長の丁寧な説明に耳を傾けながら、震災当時の状況から復旧に至るまでを反芻する一行。



▲ 立野～赤水間の大規模斜面崩壊は、今でも規模の大きさが確認でき、いかに甚大な被害であったか想起される状況。

## ■大津町との意見交換

最後に、大津町役場を訪問し、同町の交通政策担当者との意見交換を実施した。山部町議から今回の意見交換について御礼の挨拶があり、同町担当者より大津町地域公共交通網形成計画をはじめとする各種取り組みなどについて説明を受けた後、JR連合・中村交通政策部長から「『チーム地域共創』をつくる9提言」（鉄道特性活性化PT最終答申・簡略版）について説明を行った。

同町の地域公共交通網形成計画は2016年3月に策定されたが、翌月に熊本地震が発生。本来であれば、路線バスの再編などを含む「再編実施計画」の策定・実施を進めようとしていたが、足踏み状態となった。とりわけ、路線バスの運行補助や乗合タクシー事業による財政負担が膨らんでおり、バス路線の見直しや中心部における巡回バス等の検討などが方向性として示された。さらには、豊肥本線の運転再開に伴うイベント実施など、賑わい創出や地域活性化などにも取り組んでいくことについても、今後の検討内容とした。

続いて、JR連合からは、JR連合の取り組みの一端を紹介するとともに、「チーム公共交通」「チーム地域共創」の形成の必要性と地方自治体に求める役割について説明を行った。

その後、松尾市議も交えつつ相互に質疑を行い、鉄道の利用促進や結節点の強化、乗合タクシー事業の経緯や利用状況、空港ライナーのもたらす効果と空港アクセス鉄道の検討状況などについて実情を伺い、意見を交換し合った。とりわけ、乗合タクシーについては同町の南北に存する過疎地域における高齢者のニーズをうまくくみ取りながら運営しているということが説明され、さらなる高齢化を控えた中での公共交通の重要性が語られた。また、空港アクセス鉄道の計画に対しても、宿場町としての歴史を踏まえつつ、阿蘇観光の拠点として検討を進めていく旨が述べられた。

大津町においては、人口増加を続ける同町のポテンシャル発揮のためにも、公共交通利用をさらに推進していく必要がある。今後ますます路線バスの再編や乗合タクシーのエリア拡大が見込まれることから、各モードをいかに有機的に連携させていくかがカギとなる。また、現在の仮庁舎から同町本庁舎の建て替えにあわせて、肥後大津駅を中心としたまちづくりや結節点機能の一層の強化が求められ、JRをはじめとする各事業者とともに、自治体や利用者といったすべての関係者の連携・協働が欠かせない。これからも大津町の発展のために欠かせない存在である山部町議とも連携し、「チーム公共交通」「チーム地域共創」の具現化にむけた取り組みが進められるよう、JR連合としても引き続きフォローしていく。



▲ 来年改選期を控える山部町議からは大津町の抱える諸課題について所感が述べられるとともに、今後も町の発展に取り組む決意が語られた。



▲ JR連合の掲げる「チーム公共交通」「チーム地域共創」の実現にむけて、さまざまな視点からの意見が交わされた。

JR連合は今後もフィールドワークを通じて得た知見などを、JR産業の持続的な発展とともに、地域の人流・物流ネットワークの将来にむけた政策立案と各方面への提言活動に活かしていく。